

青年期の自己愛と対象関係について —臨床事例の観点から—

大野 雄子

Narcissism in Late Adolescence:
From the Point of View of a Clinical Case

Yuuko OHNO

自己愛の発達とその病理については、自己愛および、対象との関係に関する理論的考察や、幼少期の愛着と適応に関する諸研究によって拡充されてきた。とりわけ、親子間の相互作用についての研究は、自己愛性人格障害患者の早期の性格形成や、その行動の特徴の理解に役立つ現象に焦点を当てられてきた。自己愛の歪みは、青年期に自己同一性を獲得していくうえで、対人関係や進路選択を通し、他の立脚点に立てないということからくる苦悩としてあらわれる。青年期は、特有の自己愛の高まりがあり、大人になるうえで健康的な自己愛へと調整を図る最終段階なのである。

本稿は、自己愛傾向が強く「いい子」と言われてきた青年期の女性が健康的な自己愛や対象関係を獲得していく過程を示し、青年期に見られる、傷つきやすさと防衛、対象関係における特徴について考察する。

I 問題と目的

1. 青年期について

青年期は、身体的成熟に伴って、精神的に自己形成を行う児童期から成人期への移行期である。笠原（1976）は、青年期の年齢区分として、10歳から抽象的思考や性が芽生える時期を前青年期、14歳から大人になりつつある身体との出会い、進路を現実を考え始めたり、親子や親密な友人関係の中での自律に取り組む時期を青年期前期、17歳から20歳代前半にかけて、現実を知り、その中で如何に生きていくかを模索する時期を青年期後期とし、その後、30歳前後までのヤングアダルト期（或いは後青年期、脱青年期）を総称して青年期と呼んだ。レヴィン（1979）は、青年が子どもの集団に属することを望まず、大人の集団にも属さないことを指摘し、境界人（marginal man）と名づけている。

本事例は、青年期後期に属する者を取り上げ、青年期の流動性が一段落し、進路選択や対人関係に直面しながら、自分らしさを発見し、健康的な自己愛や対象関係を獲得していく過

程を記す。

2. 自己愛とは

「自己愛」についてフロイト (1969) は、リビドーの一つの型をなすものとして注目した。それによれば、乳児が自分の体の一部を愛情対象とする「自体愛」から、他者を認識し、愛情対象とする「対象愛」との間の過渡的な段階を「自己愛」の段階とした。つまり、自己愛の状態から、対象愛の状態へと向かう方向性こそが健全な初期発達であるとした。この主張に対し、コフト (1994) は、「自体愛」から「自己愛」を経て、「自己愛のより高度なかたち」へと至る経路を主張した。「自己愛のより高度なかたち」とは、自己愛の構造の再形成が起こり、それらがパーソナリティーの中へと統合されるようになることである。すなわち、理想が強化され、ユーモア、創造性、共感、英知といったような健康な自己愛への変形がごくわずかでも達成されることなのだ (オーンスタイン, 1978)。この自己愛の概念は、コフトの臨床的な研究から発展したものであり、病理的観点よりも非病理的な観点に重点が置かれている。

3. 自己愛の病理について

自己愛を過度に示す場合は、自己愛性人格障害としてDSM-IV (アメリカ精神医学会 1996) に以下のような診断基準が示されている。①自己の重要性に関する誇大な感覚をもっている。②限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。③自分が特別であり、独特であり、他の特別なまたは地位の高い人達にしか理解されない、または関係があるべきだと信じている。④過剰な賞賛を求める。⑤特権意識、つまり特別有利な取り計らい、または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待する。⑥対人関係で相手を不当に利用する。つまり、自分自身の目的を達成するために他人を利用する。⑦共感の欠如。他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしなない、またはそれに気づこうとしなない。⑧しばしば他人に嫉妬する、または他人が自分に嫉妬していると思ひ込む。⑨尊大で傲慢な行動、または態度である。これらのうち5つ以上の該当が自己愛性人格障害の診断の基準となる。しかし、DSM-IVには「自己愛傾向は、青年期にはよくみられるが、必ずしも自己愛性人格障害となることを意味していない」と付言されており、一般的に青年期においては、自己愛が高まることを指摘している。

福島 (1992) と町沢 (1998) は、自己愛傾向を示す青年に注目しているが、その青年像には違いがある。福島は、自己中心的で傲慢、他者に配慮したり、他人を愛したりすることが難しいなどの特徴を持つ青年を示すのに対し、町沢は、傷つきやすく人と深く関わることを避ける青年のことを示している。ギャバード、G.O (1997) は、DSM-IVに示されるように誇大的で攻撃的、自己中心的を特徴とする自己愛傾向だけではなく、他者の反応に過剰に敏感で傷つきやすいという特徴を持つ自己愛傾向の存在を説明している。

4. 青年期の自己愛の高まり

青年期には自己愛が高まるということについては前に述べたが、その一因としてバリント(1999)は、受身的対象愛の存在を述べた。つまり自己愛の状態を、愛されたいという欲求が満たされない時に仕方なく自らを愛するものと考えたのである。これに従うと、他者から愛されない、好意を持たれないということが自己愛傾向になる原因といえる。

小此木(1981)は、青年期には親からの受身的対象愛が満たされなくなるために、自己に注目し、親からの受身的対象愛から、異性を求めるという新たな対象希求への移行に伴う欲求不満によって自己愛が高まることを述べている。

5. 目的

本稿は、他者の反応に過剰に敏感で、傷つきやすい自己愛の特徴をもつ青年期後期(25歳・女性)の事例に注目し、青年期における自己愛の高まりと、進路選択や対人関係に直面することで自分らしさを見つけ、健全な自己愛を再形成していく過程や、その中であらわれる傷つきからの防衛と苦悩、特徴的な対象関係について分析検討する。

II 事例提示

以下に、事例を提示する。「 」はクライアントの言葉、〈 〉はセラピスト(筆者)の言葉である。受理面接時に簡単な生育歴や現在の問題などの情報を聞き、本人と話し合った後に治療構造を決定した。原則として2週間に1回50分の本人との対面式の面接を継続した。医師が平行して親面接を行ったが、そこでの情報はここでは省略する。

1. 事例の概要

クミ(受理時25歳)は抑うつ・摂食障害・希死念慮を訴え、筆者の勤務する医療機関に通っていたが、担当医師の交代に伴い、本人より心理面接の希望があったため、治療開始(X-1年1月)から1年2ヵ月後(X年3月)より筆者が継続したケースである。クミに会った印象は、小柄で色白、服装や言葉遣いからは品のよさや礼儀正しさがうかがえた。対人態度は、謙虚で接触性がよく、相手に不快を与えないように必要以上に空気を読む様子が行動が見受けられた。生育歴などは、担当医師の聞き取りやクミからの情報に基づいている。

家族構成は、父親・母親・姉・兄・弟の6人である。父親は50代後半の開業医、同年代の母は元看護婦で、病院経営の手伝いで忙しくしている。同業の父方祖父母とは、長年にわたり不仲で、特に母親は受け入れられていない存在であった。姉は他県に嫁ぎ、勤務医をする兄は、結婚をして自宅近くに住む。弟は医師を志す学生であったが、交通事故によりX-2年12月に亡くなった。父と母の不和、姉・兄とは幼い頃から打ち解けず、よりどころのない寂しさを抱えていたクミの唯一理解者であった弟の喪失と、「弟の分まで生きてね。」という周囲からの言葉がストレスとなり、(母方)叔母の家に住むが、死をほのめかしたため治

療に繋がった。X年2月、クミに理解を示していた母方祖母が亡くなる。

以下、生育暦・現病歴について述べる。クミをめぐる周囲の期待は、兄や姉に寄せられることが多く、クミは、幼い頃から「不要の子」と感じて育つ。母親は、自分が父方の親戚から認められないことや、父親についての愚痴を全てクミに話し、クミは受け止め役となっていた。小学校5年生の時には、従兄から性的いたづらを受けるが、誰にも話していない。中学生の頃は、父方祖母から従姉妹と成績を比較され劣等感を覚える。人から認められたいという気持ちが強く、部活動の部長などを率先して行った。大学在学中に書道を学び師範となるなど実力を身につけるが、書道で生計を立てることが難しいと母親から聞かされると、大学卒業後は看護学校に入学する。しかし、看護学校では周囲との年齢差になじめず、特に弟の死をきっかけに学校を続けるかどうか更に揺れる。亡くなった弟が「お姉ちゃんには看護婦は合わない。自分の好きなことをしたらいいんだよ」と言っていたという理由で看護学校を中退する。その後は、書道塾で週に2日間の手伝いをしている。看護学校在学中から芸術関連の仕事をする男性と交際をしているが、彼の煮え切らない態度に不安を募らせていた。その不安を母親に打ち明けると、応援していたはずの母親から「医者の子なのだから、サラリーマンとは結婚できない」と交際を反対され、X年1月 遺書を書き、多量の薬をのみ自殺未遂をする。「彼がすぐに来てくれなかったのがショックだった」と話している。その他、大学時代より精神的に不安定になると、過食嘔吐や買い物依存の症状が続いている。

2. 面接経過の概要

以下に、約1年4ヵ月 計30回の面接経過の概要を示す。便宜上第Ⅰ期から第Ⅲ期に分ける。

第Ⅰ期 傷つきやすさと防衛的態度

〔X年3月～5月〕

クミは、初回面接の中で肉親の喪失の苦しみから立ち直りたいという目的を示す。特に幼い頃から両親の不和を目の当たりにし、そんな時に同じ立場で励ましあってきた弟を失った悲しみや、周囲の悲しみが「弟の分まで生きてね」という言葉で自分に向けられることへの違和感や苦しみについて話す。今まで自分こそ「死にたい」と感じ、「死」に近いものだと思っていたにも拘らず、身内に偶然にも不幸が重なったことに罪悪感にも似たためらいを持っている。「弟から交際している彼と幸せになれと言われたので、頑張らなければならない」、「祖母の亡くなった日と彼の誕生日が偶然にも同じ日にちであったことを父に「不思議な縁だね」と言われた。あまりにも運命的で祖母が彼に向き合えと伝えているのだと感じた」。彼との話を中心にしたいのかと尋ねると、大きくうなずき、交際してはいるが、誘っても忙しくて逢えず、メールもなかなかくれない彼が、自分を本当に愛してくれているのかという不安を話しはじめた。カウンセリングの目的は、その日のうちに彼との関わりと自分自身の安定を図ることに変更となってしまう。「彼は王子様的な存在。弟のお葬式にも参列し、両親を励

ましてくれた。49日法要では、これから頑張ろうねと指輪をくれた」。〈あなたの不安な気持ちを彼は知っているの〉「…彼には、自分を出せず、気持ちを飲み込んでしまうんです。特に不安な気持ちは言えない」「嫌われたら嫌だなんて思う。だから、彼の言葉や行動から、私を愛してくれているのかを感じ取るようにしている」。その後、不安な気持ちを母親に話したことで交際を反対されたうえ、彼の優柔不断な態度を批判されたことがきっかけで、1月に大量の薬を飲み自殺未遂をしたことについても話す。また、現在は彼の気持ちを推測したり、行動をおこすのによい日を調べたりするために占いに依存しているということであった。

以前から予定されていたフランス旅行に出掛ける。帰国後の面接は、今までに比べ明るく、エネルギーさえ感じられた。帰国後すぐに彼がメールをくれたことが嬉しかったのである。「旅行をしている間に、彼に私の存在が必要だと気づかせたかった」と話す。食事の約束をするが、彼から予定を延期される。「これは、もう逢えないということでしょうか…」と筆者に尋ねる。クミはこのような類の質問を多くする。そして、自分なりにマイナス思考に憶測し、事実が分からないところで落ち込む。これは、明らかに彼への訴えであるため、その都度、彼に聞かなければ事実が分からないと伝えるようにする。彼の仕事の合間によく1時間会う約束ができると、喜びながらも「私は自分の自己愛が低いのか、高いのか、時々分からなくなります」と苦笑する。土産を持って彼を訪ねると、彼からは、クミの自殺未遂の一件で交際することが怖くなり、彼自身も心療内科で治療を始め、主治医からしばらくの間の交際を止められたため、当分会うことができないということが伝えられる。

第Ⅱ期「いい子像」と母親との分離

〔X年5月～6月〕

「母親に彼の頼りなさを罵られた。お前は彼に騙されていると」。〈あなたはどうしたいの〉。「彼は私が困っている時は励ましてくれた。だから私は気持ちが済むまで待っていようと思う」。〈自分で決めることが大切だと思う〉。「先生（筆者）、お願いします。今から母をここに連れて来るので、先生から彼は悪い人ではないといってください」。筆者は、クミの発言に対する違和感（操作されている感覚と、クミと母親、クミと筆者が一体化していて境界線が明確でないこと）を伝え断る。クミは納得する。

「母は周囲とうまく調和し、賢く振舞ってきた人。私も幼い頃からそうしなさいと教えられてきた。」「人に好かれなければならない、嫌われたくない気持ちが強い。自己中心的だと嫌われるし、人を傷つけないので、そんな気持ち閉じ込めたい」。

「のどまで出掛かるが自分の思いを外に出せない。」「過食して吐き出す時、気持ちがいい。40%まで我慢できるが、それを超えて食べた時には吐かないと苦しい。」「中学の時、家が病院だということを同級生に妬まれ、母に相談したけれど、反対に父に対する母の悩みを浴び

せられた。「医者娘なんて…」と私が反論すると、頬を叩かれた」。

「そういえば、ずっと母が苦勞する姿を見てきたから、心配かけまいとしていたことが沢山ある」「部活動の部長を続けるのも辛かったし……小学生の時に従兄に性的いたづらをされたこと、今も両親には言えていない」。〈大変だったね、どうして言えなかった〉「言っても聞いてくれないだろうって思ったから」〈自分でそう思ったの〉「はい、でも聞いてくれたかもしれないですね」と泣く。

「今まで父と母に尋ねられるままに、面接の内容や彼とのデートの話を逐一報告してきたけれど、それって変ですね」と違和感を持ち始める。クミが自分の秘密を守り始めると、母親は娘が筆者に操作されているのではないかと動揺する。同時期より母親の付き添いが無くなる。「今までは、どうして私だけこんなに不幸なのかと考えていたが、今はどうしてこんなに焦っているのかと思えるようになった」と自分自身を客観的に見つめるようになる。この頃から過食のコントロールをつけられるようになる。

〔X年7月～10月〕

母親の伝手でアルバイトを始める。ところが店長（30歳代・男性）の母親から自立できないクミと似たような様子を目の当たりにして「母親に頭が上がらないなんてバカじゃないか、情けない」と3ヵ月で辞めてしまう。当時クミの小遣いは月額20万円だった。ところが自分で働いたお金で買ったプレゼントを彼にあげなければ意味がないと、小遣いは母親に返すようになる。

クミは、彼との交際の経緯を知る叔母に彼の態度を非難され、他の男性との交際を勧められる。彼への気持ちを引きずりながら会うと「いい加減な気持ちでは会わないで…私には、その相手の方が大切なの」と叱られてしまう。クミはそれに強い口調で反発をし、翌日多量の薬をのむ。（彼と最後に会った時の洋服を着ていたと父親から状況を聞く）

次の面接で過量服薬について本人の気持ちを大切にしながら、それはしてはいけないということや、クミがとても大切だということなど、筆者の気持ちを強い口調で伝える。「先生、もう一度言ってください。そんなことは誰にも言ってもらったことがない。こんなことをした私に、家族は腫れ物にさわるようで、誰も話しかけてさえくれなかった」と泣く。（触れて欲しかったね。家族だから何も言えなかったのかもしれないよ）「また、マイナスに憶測するところでした」「今、自分自身が存在しているのが分かります」。面接後、今まで言えなかった小学生の頃の性的被害について両親に話す。

母親からの愚痴は聞かないように断ることができるようになる。

第Ⅲ期 自分の気持ちに気づく、実感のこもった共感

〔X年10月～X+1年1月〕

「家族の友達や親戚から食事に誘われることが本当に面倒くさいと思うようになった。今

までは、行きたいのか、行きたくないのかさえ感覚が麻痺していて、期待を裏切ってはならない、行かなければならないと思っていた。これは、今まで「いい子」をしていたってことだろうか。もっと自分の気持ちや時間を大切にしたい」。

X年11月から本人の希望で、身体障害者施設でアルバイトを始める。採用時には体調を考慮し、週に2日だけ働くという約束が、クミの意志とは別に毎日働くことになってしまう。また、責任の重い仕事もさせられることになり言われるままに働くが、仕事の責任者にさせられそうになった際には、自分にはできない、責任も持てないということを主張できるようになる。

〔X年1月～X+1年7月〕

アルバイト先で、利用者に恋愛感情をいだかれ、遠まわしに断るが、相手は理解しようせず、うまく距離を取れないことに悩む。その経験をきっかけに相手の身になって考えることや、毅然とした態度と言葉で気持ちを伝えることは、自分も相手も守ることになることに気づく。そして、相手の立場に立つということを彼との関係に置き換え、クミも彼の気持ちを憶測の中で判断していたことや、相手には伝わっているだろうと思い込み、気持ちをしっかりと伝えていなかったことに気づく。「相手の気持ちを察しあうという美意識が私の中にあったけれど、気持ちを伝えなければ、相手の気持ちにも触れることが出来ないということがようやくわかった」。

「私は、120%頑張ってきたけれど、自分の中でだけで恋をしていたのかもしれない。」「今度、彼に逢えることになった。何て言ったらいいのかな。私は、彼がよくなるまで、いつまでも待っていたいと思うんです。好きだから、とても苦しいんです)(それをそのまま言ったらいいと思います)「分かっているんです。自分だけの世界に入っていること。でも周りに壁があるようで、どうも出られない」(苦しいね)「でも、出なければ何も始まりません。」クミに新たな自信が生まれていた。

クミは、勇気を持って彼に会い、1年間どう過ごしたかを話し、これからも待っていていいのかなどの思いを伝え、自分が働いて得たお金で買ったプレゼントを渡す。相手からは、「先のことは分からない。自分に固執せずにやりたいことをやって欲しい。男性は自分だけではないので、他の人にも目を向けて欲しい。結婚は、君かもしれないし、誰なのかは分からない」という言葉が返ってくる。

「考えてみたら腹が立って、自分がばかだったなあと考えた。彼が「また会おう」というので、嫌いではないから、また会おうと思うが、もう一人でのめりこみはしない。感じたことは、やっぱり彼は素直なのと、自分が1年前の自分とは変わったということ。以前だったら彼の言うことをしっかり聞き入れられなかった。極端にプラスに捉えたり、マイナスに捉えたり、それに疲れると薬を大量にのんでいたと思う」「愛することへの苦しい実感があっても、愛

されることに疎かった私がいる」「曖昧な表現で理解しにくかった彼の言葉を私は、聞き入れているようで実は耳を疑ってばかりだったが、彼は以前から同じようなことを言っていた。ただ私が聞き入れなかつただけ」と相手の立脚点に立ち理解することに実感を伴うようになる。

「どうして私だけ辛いのかとばかり考え、家族を壊したくないから言えないことも多かった。ものを食べることと、愛情は一緒だと思うんです。私だけ可愛がられていないと…だから何でも欲しかったのかな？ これからどうしよう…。地味かもしれないけれど、一つひとつ心を込めて作品を書くことだなと思う」。

「自分の中で苦しみがあれば、良いことが来ないような気がしていた」（韓国ドラマみたい…）「あのドラマの展開、大好きです。恋愛でも同じだ」（シナリオがきれい過ぎて…）「そうですね。以前は父の不倫を受け入れられなかったけど、今の立場から思うと、「父も人間だなあ」と思える」（お母さんや社会の立場から、色々と経験をしたクミさんの立場に変わったのかな）「はい、母や社会が望む穢れのないものと、私が経験から感じるきれいさとは違うものがある」「今までは、自分の気持ちも言えなかつたし、以前に比べ自由さが広がった。兄がもっといろんな人と付き合えという意味が良く分かる」。

その後、アルバイトを通し社会への適応が円滑になる。職場を替え毎日働くことができるようになったことや、自分の意志を大切に、対人関係の中では自分の力で健康的に自分を守ることができるようになっていくということ面接は終了となる。フォローアップの面接時も問題なく過ごしている様子であり、その後もクミからの連絡はない。

Ⅲ 事例の臨床的考察

1. 自己愛の補償

クミは、幼い頃から「いい子」を演じてきた。その背景としては、自分を「不要な子」と感じていたこと、祖父母に認められない母親と共依存の関係にあるクミは、自分が祖父母に認められることで母親の立場を守ろうとしていたことが考えられる。家族内の力動を補うべく行動がクミ自身も気づかぬうちに母親との一体感を強める原因となっていたことが、面接が進むにつれ明らかになっていった。バリントが言うように愛されたいという欲求が満たされない時に仕方なく自らを愛する、つまり、本来は母親から満たされるべき愛情を不安定な母親と一体になってしまったことで、クミは自分自身で自己愛を補償していたものと思われる。また、彼との関係性でいうと、自分がお返しに相手から愛され、満たされるために、まず自分の方から相手を愛するという行動をしていたところも同様といえる。

2. 理想化とシナリオ

面接の最後に「自分の中で苦しみがあれば、良いことが来ないような気がしていた」と

というのは、クミが美しいと感じ描いているシナリオである。つまり、苦しみはクミにとって恋愛の要素であり、苦しい状況の中での努力こそエクスタシーを感じる理想なのだ。彼を王子様的な存在として見ていたこと、祖母の命日が彼の誕生日と同じであるということや占いの結果を運命的なものとして誇大的に理想化し、要求水準の高い美談に作り上げたことで現実と隔たりを作った。小此木（2000）は、人生における満足、不満足は、その人のこころの要求水準によって決まり、それと現実との関係やギャップがこころの痛みに繋がると述べている。

しかし、クミにとって、理想化するという行動は、防衛機制の一種であり、彼に陽性転移を示し、それがクミを支える原動力となっていることから、あえてそれを否定せず、利用することで、健康的な自己愛への修正を試みた。それは、クミが描いている誇大的で、美しく彩られた自分の内的世界から出て、自己愛に幻滅を与え、幻滅の苦痛を一つひとつ経験することを通して、リアルな自分との関わりを育てるという作業である。クミは、彼との対人関係のあり方に第Ⅰ期では、嫌われたくないために自分を出せず、言いたいことをのみ込んでしまう自分を感じ、第Ⅲ期では、察しあうことを美意識とし、自分の気持ちを伝えていなかったため、関係性が成立していなかったことに気づいていった。

3. 対象関係と操作

クミの対象関係は、二者関係とは言い難いものであり、それによる困惑が様々な場面で現れた。まずは、母親と一体であり、境界が意識できない関係性があらわれた場面を挙げる。例えば、第Ⅱ期でクミが両親に対し、面接やデートの内容を逐一報告することに違和感を持ち始め、報告しなくなったことで母親が筆者に操作されているのではないかと怒りをあらわにした場面、これは分離されてしまう母親の不安が筆者とクミの関係構築の妨害をしたと考えられる。また第Ⅱ期で彼が悪い人でないということを自分の代わりに母親に伝えて欲しいと筆者や母親を自分の手足のように操作しようとした場面や、筆者との面接以前に、彼に対する自分の不安を母親に投げ込むことにより、母親が不安になり交際を反対するという場面からは、母親との一体感から来る操作性がうかがえた。本来はクミが不安を抱え成長しなければならないところなのである。クミは、無自覚ではあるが巧妙に母親を操作し、自分は交際を反対された被害者となり、自分が穢れないことで、周囲の者を悪役にしてしまったのである。それは彼や筆者との関係性の中でも同様の操作性がうかがえた。例えば旅行に出かけることで、彼に自分の大切さを知らせるところも操作するという背景があり、彼に会いに行く際に、伝えることに戸惑い、彼に伝えるべき言葉を対象とならない筆者に語る等、フロイトのいう対象愛にまで発展しないというのがクミの対象関係の特徴であった。

しかし、アルバイト先で店長親子の密着した関係を見て、自分を客観視し、母親と近い叔母と衝突するなどの経験を積み、母親との距離を修正していった。過量服薬は良いとは言い

がたいことであるが、事後の筆者との関係性を再認識することで、「今、自分自身が存在しているのが分かります」と個としての自分を認識し始めたこと、幼い頃の性的被害を両親に打ち明け、家族を操作することを手放すことへの機会となった。

4. 過食について

過食嘔吐の症状は、面接の中では直接的に語られていない。しかし、クミの話の背景には、吐き出すこと、のみこむことが多く散りばめられているのが分かる。例えば、のみこむということでは、母親の愚痴を浴びせられるという、クミにとってはのみこまれる体験を余儀なくされてきたことや食べ物を愛情を得たいという欲求に置き換えていたことが挙げられ、吐き出すということでは、彼への気持ちがのどまで出掛かるが自分の思いを外に出せない行動や、小学校の頃の性的被害を両親に言えずに苦しむところが挙げられる。面接の中では、それら家族や周囲との関わりを話し、両親との心的な距離を取り戻すことで過食や金銭の感覚についてコントロールできるようになったと思われる。クミにとって過食嘔吐は代償の行動であったことがいえる。

5. 実感を伴った共感

クミは、自分の気持ちを押し殺してまで、相手の希望を受け入れてしまう。いわゆる「いい子」を演じ、自分の感情にさえ気づかなくなっていた。「自己愛が高いのか、低いのか分からなくなった」という混乱も母親との不明確な対象関係が基本となっているだろう。しかし、母親と心理的に分離をし、個として「自分自身が存在しているのが分かります」と存在を確認した後は、自分の気持ちに正直に従うことができている。仕事という限られた役割の中では主張が出来るようになった。

また、自己愛傾向の特徴といえる相手の立脚点に立てないということについては、反面教師という形で自分を修正している。この気づきの速さから、クミは共感性が欠損していたのではなく、経験が少いことからその方法を知らなかったということがわかる。母親と一体になった立脚点からものを見れば、母親が指摘したように、彼に対する頼りなさや怒りを感じたことであろう。それが、自分の素直な気持ちとの間で揺れ動いたのだ。しかし、個を確立することで、ものごとを捉える立脚点が柔軟になったのである。彼の立場に立ったときの共感深い実感を伴うものであった。

IV まとめ

クミは、自己愛傾向の特徴を呈しながらも、自己中心的で傲慢なタイプではない。他者の反応に過剰に敏感で傷つきやすいという特徴を持つタイプである。

青年期には、対人関係や進路選択など直面する様々な事柄によって、今まで自分を支えてきた方法では対応できなくなる壁にぶつかることがあるのだ。クミには、それを乗り越える

ために、自ら気づき、自己愛を再形成していく自我の強さがあった。陽性転移を示している彼に対する想いがクミを突き動かす原動力となり、個としての自分を認識し、それに伴って、自分の気持ちに気づき、共感をするべく立脚点が柔軟性をもってきたということがいえる。人間同士は、対象として向き合ってみなければ何も生まれない。それは、対象のみならず自己との出会いなのだ。青年期は、一時的な自己愛の高まりに伴い、修正がしやすい時期であり、大人として健康的な自己愛へと調整を図る最終段階なのである。

面接の最後には、クミの誇大感も消え、現実に対し地道な行動をし、善や美だけにとらわれない曖昧の良さをアイデンティティーに統合できている。

最後に筆者のクミとの出会いは、治療関係をベースに置いた、人と人との愛情の交流と深い学びの場であった。たまたま関係性の中で筆者がセラピストに過ぎなかったのである。ここにクミに対し改めて敬意を表したい。

この事例研究にあたっては、本人の了承を得、個人が特定できないように加筆・修正をした。

参考文献

- アメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association) 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸
(訳) 1996 DSM-IV精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- バリント,M. 森茂起・中井久夫・枘矢和子 (訳) 1999 一次愛と精神分析技法 みすず書房
- フロイト,S. 懸田克躬・吉村博次 (訳) 1969 ナルシシズム入門フロイト著作集5性欲論・症例研究 人文書院
- 福島章 1992 青年期の心—精神医学からみた若者 講談社
- ギャバード,G.O 館哲朗 (監訳) 1997 精神力動的な精神医学 その臨床実践 (DSM-IV版)
③臨床編：Ⅱ軸障害 岩崎学術出版社
- 笠原嘉 (編) 1976 今日の青年期精神病理像 弘文堂
- コフート,H. 1994 水野信義・笠原嘉 (監訳) 自己の分析 みすず書房
- レヴィン,K. 猪股佐登留 (訳) 1979「社会科学における場の理論 増補版」誠信書房
- 町沢静夫 1998 現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理 双葉社
- 小此木啓吾 1981 自己愛人間 朝日出版社
- 小此木啓吾 2000 こころの痛みどう耐えるか NHKライブラリー
- オーンスタイン (編) 伊藤洸 (監訳) 1987 コフート入門—自己の探求 岩崎学術出版